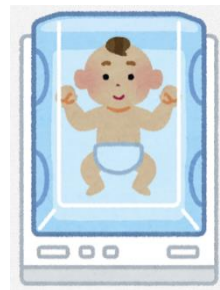


# 未熟児はどう育つ？

みなさま「未熟児」という言葉を聞いたことがあると思います。医学的には「未熟児」は、2500g未満の「低出生体重児」や、37 週未満の「早期産児」を指します。これらの子どもたちはどう育てゆくのでしょうか？

日本では 10 人に約 1 人のお子さんが低出生体重児で生まれ、100 人に約 1 人は 1500g未満(極低出生体重児)と、珍しいことではありません。低出生体重児の多くは新生児集中治療室(NICU)に入院し、特に極低出生体重児では専門的な医療が必要です。当院は東毛地域で最も大きいNICUがあり、極低出生体重児を年に 25 名前後診療しています。



近年、極低出生体重児の 95%は生存し、60%は後遺症を認めません。脳性マヒや知的な遅れなどの重い後遺症は 20%前後です。残る 20%前後には軽い後遺症や発達障害を合併します。特に発達障害(注意欠如・多動性障害、自閉スペクトラム症、学習障害など)は、一般の子どもに比べて多く、最近重視されています。発達障害のために就学後の生活が上手くいかないと、その悩みからうつ状態やさまざまな精神症状が引き起こされて思春期以降の生活が上手くいかないことがあり、早期に診断し適切な支援を考える時代になっています。

一方で、幼児期に発達障害が疑われても小学校入学前には良くなる場合や、勉強面も同級生に劣っていたものが小学校就学後に追いつくこともあります。これらは、極低出生体重児の育ちの特徴と考えられつつあり、文字通り「長い目で」見守りつつ、しかも、ご家族や保育園、幼稚園、小学校で上手に支えて伸ばしてあげることが大切になります。

みなさまのお知り合いにも小さいころ「未熟児」だったお子さんがきっとおいでと思います。これらのお子さんを地域で守り育てて行けるよう、ご協力ください。



【小児科診療部長 大木 康史】

